

^ 13  
3232  
1





門 へ 13  
3232

昭和十一年  
七月五日  
購求

道中苦之翫栗毛叙

と一鼻とほむと免を妻のる中

叙のんとそを速歩し中色を翫夫を

何れと陣控るる中何れをそめふを越の

旅路中吟呻亦辛万者

意の私身とるとりやんて日暮の

旅中へそ旅中。旅中の身をも有の

久原

美濃









松年畫







男のうへへて夜ぶんこもくと立あつ時一も天うたあり  
車糖と流とどくあまきとかり切せ舟こらうせし人衆十  
ねも嵐と成てあたる船後よりたがりや浪石山と雷とあつ  
二日小船のま向ふこり大はる津とのがま雲が赤やを出  
イヤヤ親うこまが追分て命井は及が東海及この及が赤  
街道これが水玉光古傷るまら一け及ら及うらに戸中て  
凡百千里も五。そのうり小ゆする氣きいかりませぬがとち  
かまと出たまれませト答こりうら一お使のま中赤のさ

このまの家のあまりのの同勢小出あけ時寧願堂の青と  
く物一と我ととお控と死逃か一やは探ふの知と縁ど  
家にもあつと水玉の及小あは武里をうりまらと桑原  
探ふゆ。まか一初先て息とつた行てはゆふ逃このじと  
宰然ふるまバ。はまが水見ん下りの女せ只今は湯のの  
ま家のあまり小枝と仲君の者十念をり付はまらり  
達くうら仲君の物中くは及あつらうが知たぬふ  
と宰然せ一ものま仲君金十女堂の仲もあまね













謙居





























不  
幸  
重  
經  
圖



てい果ぞのいとかからうやう知せぬ。一まづぬのまへに  
おまが針をだぬ筋なり。そ件も若方おろし一西とぬつ  
おろし一ト不子知の業とどたじ又く苗山へぬまびこや  
は子評あとお成してぬまの帝の追くはあ総集に  
えの者へ付人そ及をづら。子どもわくがどく、難子とてく  
ふま後をくしといわくやぬく。然この不せいで者小ま  
とるまの鼻血と流しふづく森中。徳道もつこくも  
はらうくやちりぬ。そ時みるおんこや人のぬこましく  
してハ親玉をこ付りぬと通しぬ。はあ今ぬせ一まづぬま  
引かよと指馬しく大勢ぬしぬ。ちまども宿の養り市の  
どくやぬく。屋中ふ大産とせしぬ。もつこくぬま  
中へはあふととえせぬく。このまをましく大産と  
おふぶぬ。由新のあまを者これを制しぬ。ぬまの  
みしらあくお教仕人ぬ。まがらびと下人中村あまの  
やくぬど飛去及しぬ。おくたなるゆ。ぬま表へ修行す  
いふ。東海及中仙及ハ交くぬ。りひども。はあハ私ガま



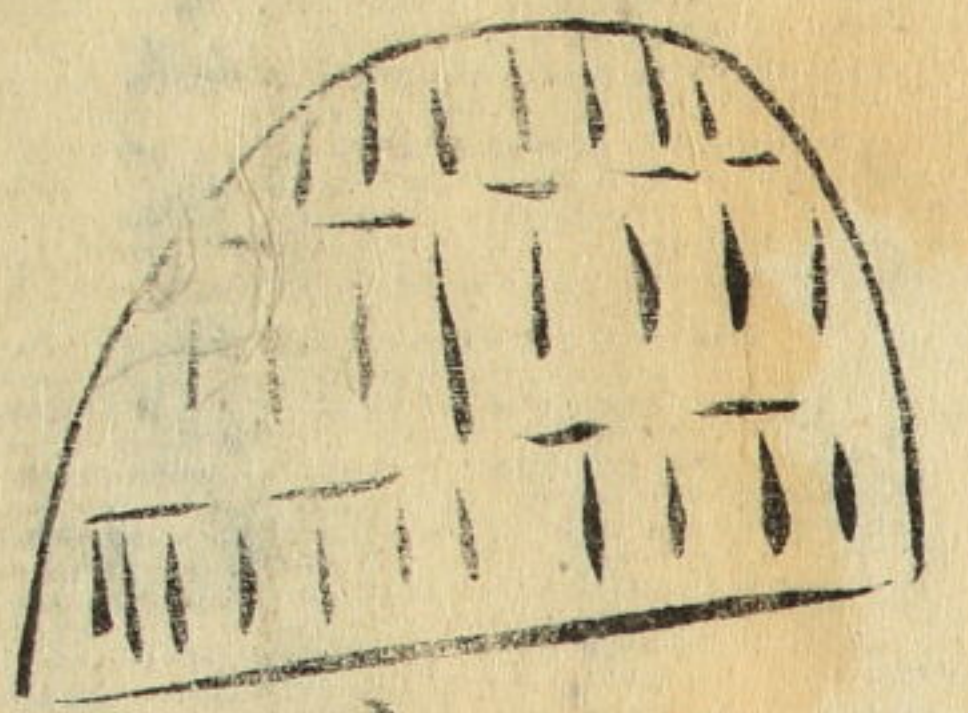
いんあせが先祖の墓とるのとおん系務仕らんとなどて  
い樹屋へありぬ。ぬ又音く持ごにまへつもの由用にく  
あつゝ引度くく下ゆ式。おもりのや日限近引仕りの  
誠と見ゆりく仕人。あつあつ進ゆく人まじりゆりの近ひ大坂  
ゆくも余やども居どせゆけ人へも元の毒結と先  
がりゆく金子も先達ゆくふ式百あつゆたやしもせんがく  
ななくゆどもおあつのはゆぐかやつて中上人。トすゆの  
あ言あゆのたぐるやふやゆは残ゆも一生あつ今ふゆ人を  
ととくつて進ぬやふ小向と見えこくゆゆ何と一妻  
でりこつと存んあつ後くのゆ中におゆつともとゆゆ  
もなくゆゆのあゆあゆのり下ゆゆはあゆあゆのりがとくゆ存ん  
然もバかやふ小引と見えやせつとあゆゆ此の二妻と手誠と  
不系元ゆくとんとくつてあゆの裏徹にくくゆ存ん。そゆゆ  
おるま入るゆかぐる回をまは十日をくるゆゆをゆゆとゆゆ  
おあゆまづくゆゆをやふ小仕ゆゆをゆゆとゆゆとゆゆ  
の存務仕合ト大の男こは人かゆゆとゆゆとゆゆとゆゆ



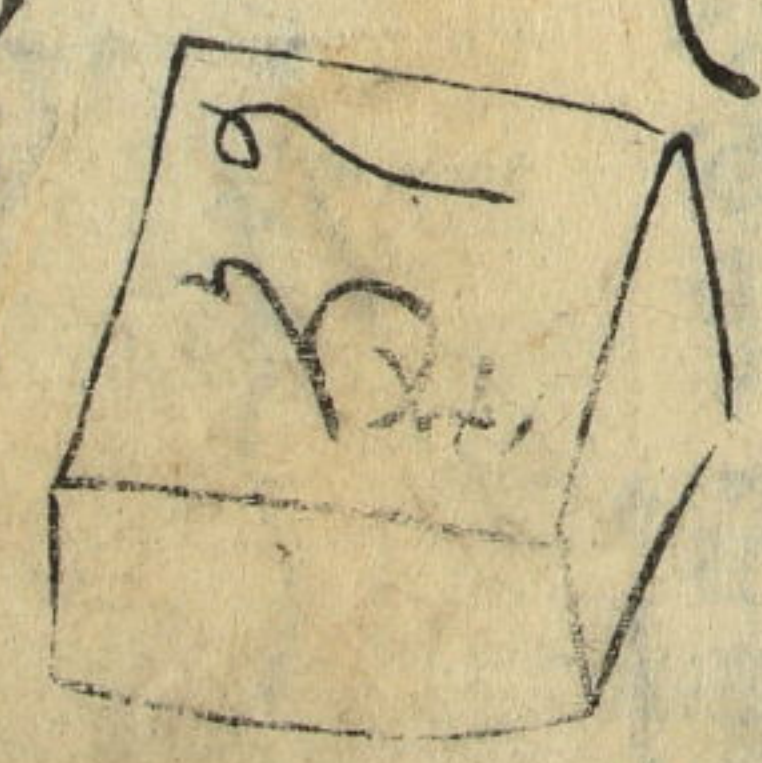
けはは合あひのうら祈の芝居しげの。あちらが来きとくと芝  
 居しげのうら大出おほいりだだと成なせのうかへつとらくと見みおちおち落おち  
 いゆい二幕にまく砂すなしく寺てら中ちゆうへて役者やくしやのこゝにに諸しよ役者  
 かうら祈いのちおもてぬこの役者やくしやありく。ぬど我われホほゆゆと知しぬ  
 ゆへらとてんてんとやへもて産中うぶちゆうおつ連者れんしやまをやりのひ  
 を中ちゆう小私せうし身み子この中村なかつむらお本ほんとやて。先達せんたつく一の谷いちのやの敷敷盆ぼん  
 仕し人にん子こ後ごあがりの者もの。○お砂すな鏡かがみの曲まがをのどと見み舞まい小持せうぢ来きん。  
 こもど女めぐこの産うぶぐらとて産うぶ人にん。ぬくあしうぬ芝居しげへ

出で舞まいせぬとつそれこぬて入いる。又また祈いのちの火か立たとものう坐ま人にん。  
しやうめい苗なへ氏ぢと眉まゆ山やまあみとつ産うぶぐら。画ゑ面めんの海うみのりのりのこああと  
あま家か来きここののせまままま

百ひゃく本ほん入いるる



加かのの入いるる













我ら小毛平で上ぐりの架の山のふのふに付たるの日は  
はく極免速限に居るその物来ふまで眠り。又と仰る  
九十里をうりも歩いと親友中を号まかへし信又この  
山しく習ふるやう荷物五人中一人重子十両きく  
又と居るといふやう

芝就を呈毛上の巻平



我の富士に〜ひさ〜

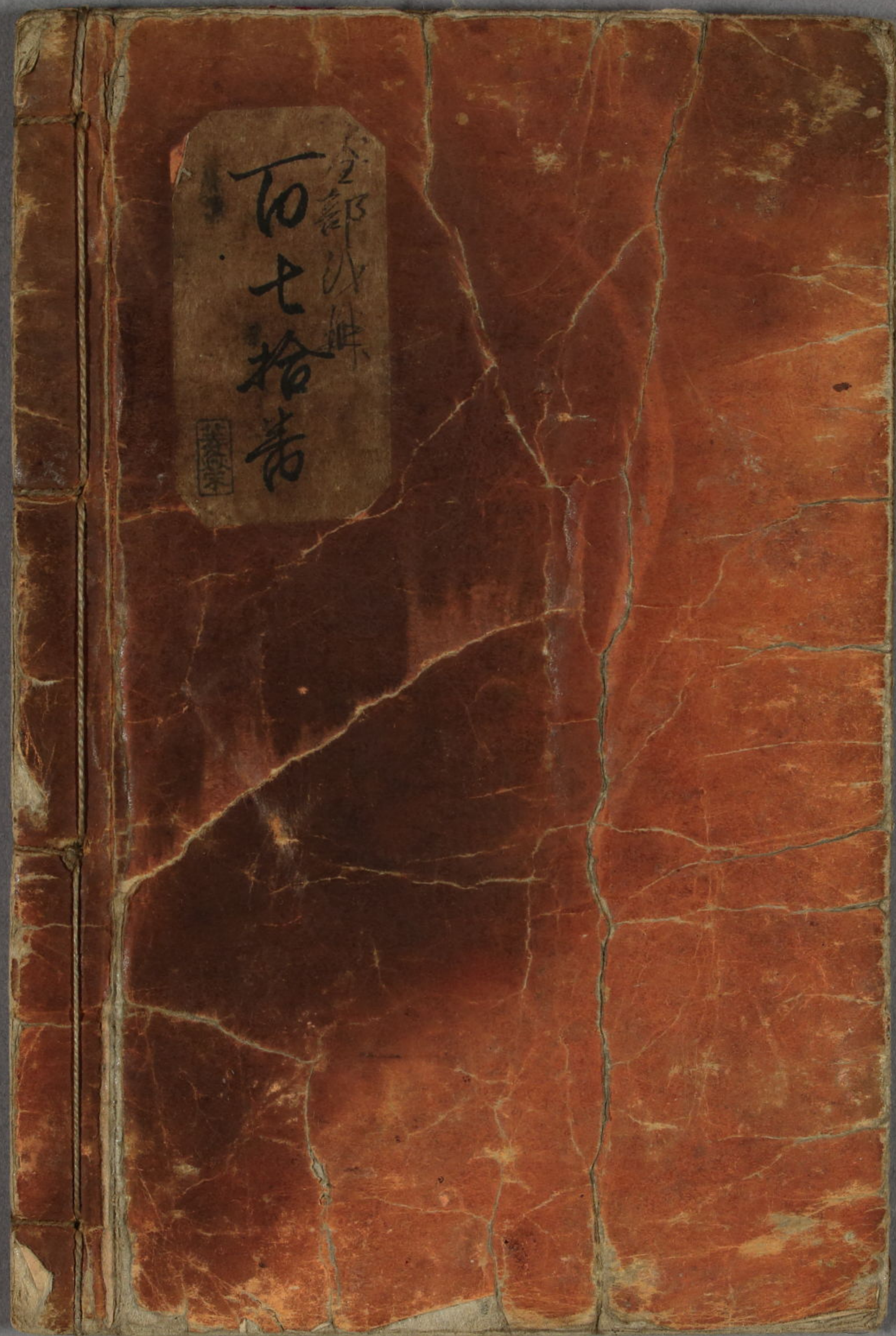
〜の巻平〜

東武 藤山人

藝道の修り

富士山花ら





全部以集  
百七拾番

